

城里町の文化財さんぽ(二)

県指定文化財

「両界曼荼羅版木」

指定年月日／昭和三十七年二月二六日
所在地／城里町徳蔵 管理・所有者／徳蔵寺

両界曼荼羅とは、真言密教の教主である大日如来の説く真理や悟りの境地を絵画で表したものです。論理的な知恵の世界を表す金剛界曼荼羅と、実践的な理法の世界を表す胎蔵界曼荼羅(大悲胎蔵曼荼羅)からなり、両者は不二平等のものとされています。



徳蔵寺の県指定文化財「両界曼荼羅版木」は、桜材二枚を中央で合わせ、上下に横木を付けて一面としています。版木の大きさは、縦八六センチメートル、横六八センチメートル、厚さ五センチメートルです。版木の表と裏には、それぞれ唐草文帯に



▲胎蔵界曼荼羅の版面



▲金剛界曼荼羅の版面

囲まれた金剛界曼荼羅と胎蔵界曼荼羅が、細部まで精密に彫られています。版木の制作年代は、室町時代と推定されています。このような版木を用いる木版印刷は平安時代後期から本格的に始まり、仏教の大衆化に大きな役割を果たしました。木版の曼荼羅図は、室町時代に数多く刷られ、信者で作る講組織の崇拜対象として提供されたとされています。

解説文／町文化財保護審議会会長 小山映一
写真提供／徳蔵寺

問合せ 教育委員会事務局

029-288-3135

俳句

下り鮎川面の風の岸へ寄り
飯田 勇一
そこだけが明るく雨の花浅沙
鯉淵 寿美恵
成人式堂々たる孫まぶしめり
今瀬 多代美
硝子越し庭を眺むる久女の忌
中野 千賀子
霜の花鳩やはらかに降りたちぬ
綿引 英子
初しぐれ郵便受けにまよひ文
森 静江

文芸しろさと

短歌

秋うらら散步の小径に群れていた
あの日赤蜻蛉いづこに消えた
青柳 京子
夫と行きし海外の旅ヨーロッパ
十日間なり過去の懐かし
所 美恵子
山茶花の一木にたわわ花咲き
て母逝きし月めぐり来たりぬ
山形 式妙
配達の新開少年たりし人今
は三児の父親となりをり
杉山 みちこ
低き位置に濯ぎもの干される
て老の独り住むらし山里は秋
渡辺 千紗子

川柳

雪連山添ひて流るる千曲川
飯村 昭子
母のシヨール三十年の桐筆筈
竹内 幸子
校庭は裸木ばかりつむじ風
瀬谷 博子
年新た桂太鼓の慰問打ち
岩下 金司
雄雄しく背景に立つ男松
田口 勝元
座布団で飛び乱れ太鼓や初相撲
寺門 孝子
表紙見て買うのためらう週刊誌
富田 多蔵
お年玉笑顔のお返し孫の技
車田 綾子
日本はトランプよりはカルタ取り
飯村 孝一

廃屋となりたる家を色彩り
て紅葉鮮やか晩秋の風吹く
大森 久子
夫も息子も逝きて幾年除夜の
鐘鳴るを聞きつつ命重ね来
枝 不美
ほつほつと燈のようにゆずの
実の残れる庭に初日かがやく
島 愛子
はなれ住む女孫の電話手に
すれば教員試験合格したりと
坪井 きよ子
寒の入り枯れ葉の下の春蘭
は固き花芽を早や抱きおり
萩谷 登喜子
海風の吹き来る朝祈禱受く
虚空蔵尊に年あらたまる
富田 佐智子

